

高木神元博士古稀記念論集
仏教文化の諸相 抜刷

時輪マンダラの墨打ち法

森 雅 秀

1 はじめに

インド密教の歴史の最後を飾る『時輪タントラ』(*Kālacakratāntṛa*)には、700尊以上の尊格からなる壮大なマンダラが説かれている。正式には「身口意究竟時輪マンダラ」(*Kāyavākṣittapariniṣpannakālacakramaṇḍala*)と呼ばれるこのマンダラは、その名のとおり、身密マンダラ (*kāyamaṇḍala*)、口密マンダラ (*vānmaṇḍala*)、意密マンダラ (*cittamaṇḍala*) の三重の楼閣をそなえ、さらにその周りを地水火風空の五大を表す五大輪と火炎輪とによって囲まれている。

マンダラの中尊であるカーラチャクラ (時輪) 尊は、四面十二臂を有する守護尊で、明妃ヴィシュヴァマターをともなって、ヒンドゥー神ルドラとカーマを踏みつけて立つ。カーラチャクラは八葉蓮華の花芯に位置し、その周囲の蓮弁にはクリシュナディープターをはじめとする八尊の女尊が置かれる。この八葉蓮華を中心に置く意密マンダラは、さらに四仏、四仏母、六金剛女、六大菩薩、四忿怒尊で構成される。これらの尊格の多くは秘密集会マンダラなどにも含まれるが、その配列は時輪マンダラ独自のものである。

第二重の口密マンダラには、四方と四隅に8つの八葉蓮華が描かれ、各蓮華の花芯には八母神 (*aṣṭamātrkā*) が置かれる。これを64人のヨーギニーが8尊ずつ8つのグループに分かれて、各母神の周りの蓮弁に登場する。

一番外側の身密マンダラには、ヒンドゥー教起源の12の護法尊が、やはり蓮華の中心に位置する。この蓮華は三重構造で、合計28の蓮弁をそなえ、各蓮弁には単音節の文字を名称とする女神が描かれる。彼らは1年を構成する12箇月とそれぞれの月に含まれる28日を象徴するといわれ、マンダラでは四方にそれぞれ二つずつ、さらに四隅の一つずつ、等間隔に配される⁽¹⁾。

時輪マンダラの典拠となる『時輪タントラ』には、伝説のシャンバラ王カルキ・ブンダリーカ王に帰せられる注釈書『無垢光』(*Vimalaprabhā*)がある⁽²⁾。同書は単なる注釈書にとどまらず、その権威は經典にも匹敵するといわれている。マンダラの説明は『無垢光』の第3章「灌頂品」に含まれる。とくに第3章第3節「マンダラの開示という大いなる教え」(*maṇḍalavartanam nāma mahoddeśa*)には、マンダラの輪郭線の測量に関する詳細な記述がある(Rinpoche 1994a: 46-49)。いわゆるマンダラの墨打ち法が説かれているのである。

『時輪タントラ』が成立したのは11世紀前半と考えられている⁽³⁾が、そのおよそ半世紀後に現れた学僧アバヤーカラグプタ(*Abhayākara Gupta*)は、大部のマンダラ儀軌書『ヴァジュラーヴァリー』(*Vājrāvalī-nāma maṇḍalopāyikā*, 以下 VA)を著し、マンダラとそれに関わる灌頂などの儀礼の解説を集大成した⁽⁴⁾。彼は同書の中で、秘密集会マンダラをはじめとする20種以上のマンダラについて、ひとつひとつの墨打ち法と彩色法を解説した。これらのマンダラは米の粉をまぶした糸などで地面の上に輪郭線が引かれ、五色の顔料によって彩色された「描かれるマンダラ」(*lekhyamaṇḍala*)である。時輪マンダラについての解説は、これら一連のマンダラの最後に置かれている。これは時輪マンダラの構造が、それ以外のマンダラと異なるためである⁽⁵⁾。

マンダラは、マンダラ全体を取り囲む外周部と、楼閣の外壁部、そして楼閣の内陣の三つの部分に分けることができる。最後の内陣は「中心のマ

ンダラ」(garbhamaṇḍala) や「根本マンダラ」(mūlamaṇḍala) と呼ばれるが、VA に説かれる時輪マンダラ以外のマンダラにおいて、それぞれ異なる構造をもつのはこの部分のみで、外周部と楼閣の外壁部はすべて共通している。これに対し、時輪マンダラは内陣のみならず、その周囲の部分についても独自の構造を持つ。このため、墨打ちを解説するために、著者のアバヤーカラグプタは、時輪以外のすべてのマンダラに共通する部分をまずはじめに述べ、つぎに各マンダラの内陣の構造を順に示した後で、時輪マンダラの全体の輪郭線を説明する。ここで示される時輪マンダラの墨打ち法は、『無垢光』をほぼ踏襲しているが、内容的にはさらに詳細となっている。

『時輪タントラ』は、未解明の部分の多いインドの後期密教の中でも、内容の難解さからとくに研究の立ち遅れた経典であった。しかし、Newman による一連の精力的な研究 (1987a, 1987b, 1988, 1992, 1998a, 1998b) や、わが国でも田中公明氏による包括的な研究 (1994) が現れ、近年、研究の進展が著しい。とくにマンダラに関しては、田中氏の『曼荼羅イコノロジー』(1987) において、初めてわが国においてその全体像が示され、さらに近著 (1994) において、その思想的な背景なども明らかにされた。また、海外でも Brauen による著作 (1992) は、豊富な図版や概念図を駆使した労作で、時輪マンダラの構造の持つ意味や、マンダラに関わる儀礼にまで射程におさめた斬新な内容になっている⁽⁶⁾。

しかし、いずれの研究においても、マンダラに含まれる尊格や全体の構造が象徴する意味などについては詳しく述べられているが、マンダラの輪郭線がどのように引かれ、それによって構成される各部の名称がどのように呼ばれているかは示されていない⁽⁷⁾。この小論では VA の「墨打ちの儀軌」(sūraṇavidhi) に含まれる解説にしたがって、時輪マンダラの構造そのものを明らかにしよう⁽⁸⁾。

2 各部の構造

意密マンダラの内陣

マンダラの輪郭線を描くためには、基本となる梵線 (brahmasūtra) と対角線 (koṇasūtra) を引かなければならない。梵線はマンダラの中心を通る水平と垂直の2本の線で、これに対角線が45度で交わる。いずれも長さは8ハスタ (hasta) と規定されている。1ハスタは阿闍梨の親指の幅24個分で、60センチ・メートル前後に相当する。梵線と対角線の長さである8ハスタは、時輪マンダラ全体の大きさではなく、マンダラの外周部の一番内側の円の直径である。外周部は六重の帯からなり、その一番内側は地輪であるので、この円は「地輪の第1の線」と呼ばれる。そしてこの半分である4ハスタが「マンダラ」の大きさとなるという。この場合の「マンダラ」とは、身密マンダラの楼閣の内陣を指している⁽⁹⁾。

この1ハスタを基準に、マンダラの測定のための単位である「マートラ」(mātra) が算出される。すなわち、意密マンダラの門 (dvāra) の6分の1が1マートラに相当する。後述するように、意密マンダラの内陣の一边は門の8倍で、さらにその4倍が身密マンダラの内陣の一边の長さになる。ここから1ハスタが48マートラになることがわかる。なお、1マートラは「親指半分」とも説明され、親指24個分であった1ハスタが48マートラであることに合致している。

意密マンダラの中心に、主尊カーラチャクラ父母仏と8尊の女尊を置く八弁の蓮華を描くために、直径4マートラの円を作り花芯 (karṇikā) とし、その外側にさらに4マートラ離れて梵線と平行に線を引いて花卉 (dala) の領域とする (図1)。蓮弁の部分は彩色の段階で花卉の形状に描かれるが、ここでは一边12マートラの正方形と花芯との間の区画を蓮弁とする。蓮華はマンダラのモチーフとしてしばしば用いられ、VAでも時

輪マンダラ以外にも11種のマンダラに登場するが、いずれの場合も花芯の直径と蓮弁の大きさは一致するように規定されている。

蓮弁の正方形の外側に、順に1、4、1マートラずつ離れて、3本の線を、梵線と平行に対角線の間引く。蓮弁と中心を同じくする一辺14、22、24マートラの正方形を描くことになる。蓮弁の外側の幅1マートラの部分と、一番外側のやはり同じ幅1マートラの部分は「金剛杵輪」(vajrāvalī)と呼ばれ、結界をかねた境界線を示す。その間にはさまれた幅4マートラの部分は「尊格の蓮華」(devatāpadma)と名付けられている。各辺の中心に、四仏を置くために直径4マートラの蓮華が一つずつ置かれるためである。この蓮華の左右に柱(stambha)として1マートラの間隔をあけて長さ4マートラの線を2本ずつ引く。さらにその両側に幅3マートラ、高さ4マートラの区画を作るために、3マートラ離れてやはり同じ大きさの柱を描く。この2本の柱に囲まれた部分には瓶(kalāśa)が描かれる。このように、「尊格の蓮華」の部分には、各方向に一つの蓮華、二つの瓶、4本の柱ができる。四隅にも一辺4マートラの区画が一つずつでき、ここにはターラーなどの四仏母のシンボルが描かれるが、蓮華は描かれない。

外側の金剛杵輪の帯から7マートラ離れて平行に線を引く。この部分は尊格のシンボルなどは描かれず、名称も与えられていないが、マンダラの四方を塗る分ける黒、赤、黄、白が東南西北の各方角に順に塗られる。その外側に4マートラ離れて、ふたたび平行に線を引く。この部分は「尊格の帯」(devatāpattī)と呼ばれ、六大菩薩と六金剛女のシンボルが配される区画となる。さらにその外側に1マートラ離れて線を引き、意密マンダラの内陣の一番外側の線、すなわち根本線とする。VAではこの内部のみが「意密マンダラ」の領域に相当すると述べられ、楼閣の外壁の部分は「マンダラ」には含まれていないことがわかる。根本線は一辺48マートラの正方形であるが、各辺の中心6マートラ分は、線を引いた後に消す。楼閣の

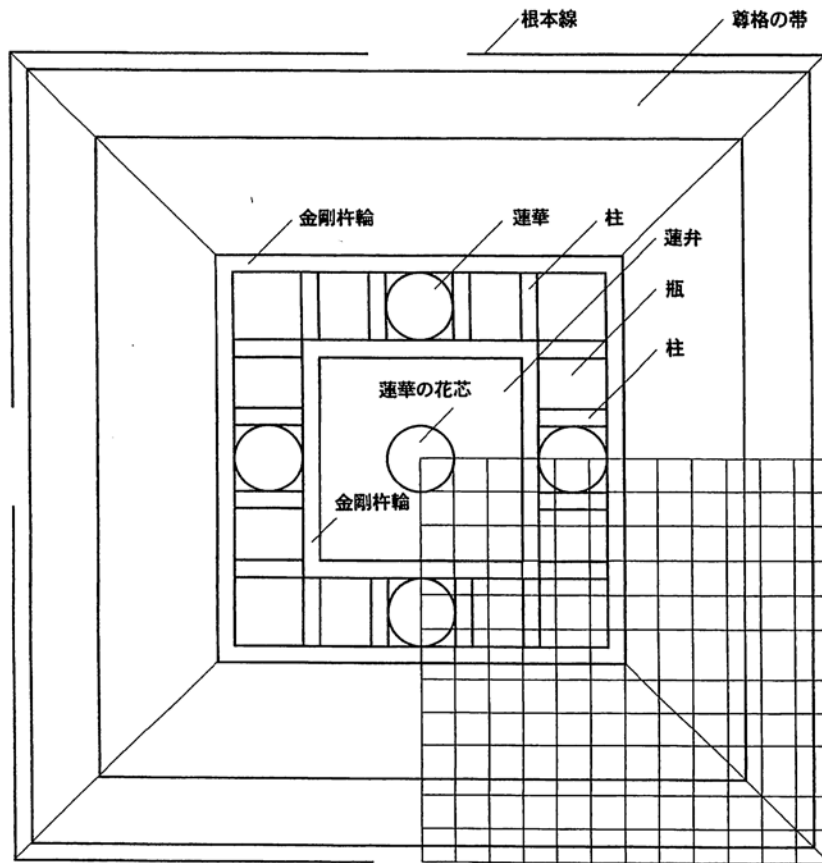


図1 意密マンダラ (1目盛は2マートラ)

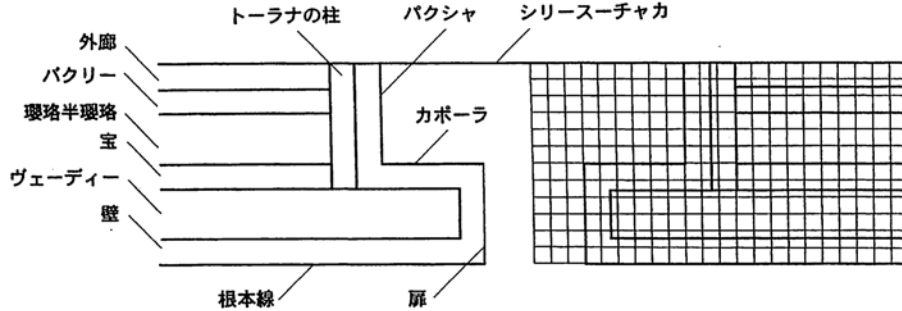


図2 意密マンダラの門の部分（1目盛は1マートラ）

四方に置かれた開口部である門を示すためである。

門とその周囲

時輪マンダラを構成する身口意の三つのマンダラは、内陣をのぞいてすべて同じ構造を持ち、意密マンダラの2倍が口密マンダラ、口密マンダラの2倍が身密マンダラと、大きさのみが異なる。比率では1：2：4となる。門、外壁、そして門の上に置かれたトーラナの大きさも同じ比率になり、VA では意密マンダラにおいてのみ、各部の大きさが具体的な数値とともに示されている（図2）。

根本線の中央に作った門6マートラ分が基準となり、それと同じ長さの扉（niryūha）、カポーラ（kapola）、パクシャ（pakṣa）で楼閣の開口部が作られる。凸の字を逆にした形で、楼閣の外壁に重なる部分は「シリーズーチャカ」（śīlisūcaka）と呼ばれる。次に、根本線から1.5マートラ離れて、平行に進み、これらの線に沿って折れ曲がり、シリーズーチャカに至る線を引く。この区画は「壁」（bhitti）と名付けられる。根本線と平行に、さらにヴェーディー（vedī）、宝（ratna）、瓔珞半瓔珞（hārārdhahāra）、バクリー（bakulī）、外廊（kramaśīrṣa）の五つの層が、外に向かって重なる。幅は順に3、1.5、3、1.5、1.5マートラである。宝以下の4層は、高さ7.5マートラ、幅1.5マートラの区画に端を接している。これはトーラナの柱

(toranastambha) を示している。

このような門とその周辺部の形態は、ナーガブッディ (Nāgabuddhi) によって説かれたものとして、すでに VA では紹介されている⁽¹²⁾。各部の名称も両者の間で一致している。ナーガブッディの『秘密集会マンダラ儀軌二十』(Śrīguhyasamājamāṇḍalopāyikā-vimśatividhi) を典拠とし、この儀軌が属する聖者流の秘密集会マンダラにしばしば描かれている。ナーガブッディ所説の門は扉、カポーラ、パクシャがそれぞれ4マートラで、二つの扉の間も4マートラであり、こことは長さが一致しない。しかし、ナーガブッディの門を含む楼閣の根本線は、一辺が32マートラであり、その8分の1の4マートラが基準となっている。時輪マンダラでは一辺が32マートラではなく48マートラであるため、6マートラはやはりその8分の1に相当する。基準となる1マートラの取り方が異なるだけで、外壁と門の形態は、両者の間で全く同じである⁽¹³⁾。

トーラナ

門の上にそびえるトーラナは、門や外壁と異なり、時輪以外のマンダラとは全く別の形態をとる。また各部の名称も独自のものとなる。ただし、高さのみは「トーラナは門の3倍」という規定があるため、意密マンダラ⁽¹⁴⁾の場合で門の6マートラの3倍の18マートラになり、時輪以外のマンダラでの4マートラの門、12マートラのトーラナと、比率の上では合致している。

時輪マンダラのトーラナは三つの段 (pura) と、その上にある「ハルミ」(harmi) と呼ばれる部分、さらに、ハルミの中央に置かれた瓶 (kalaśa) の合計五つの部分からなる。高さは第1段が6マートラ、第2段が4.5マートラ、第3段が3.5マートラ、そしてハルミと瓶はいずれも2マートラで、合計18マートラとなる (図3)。

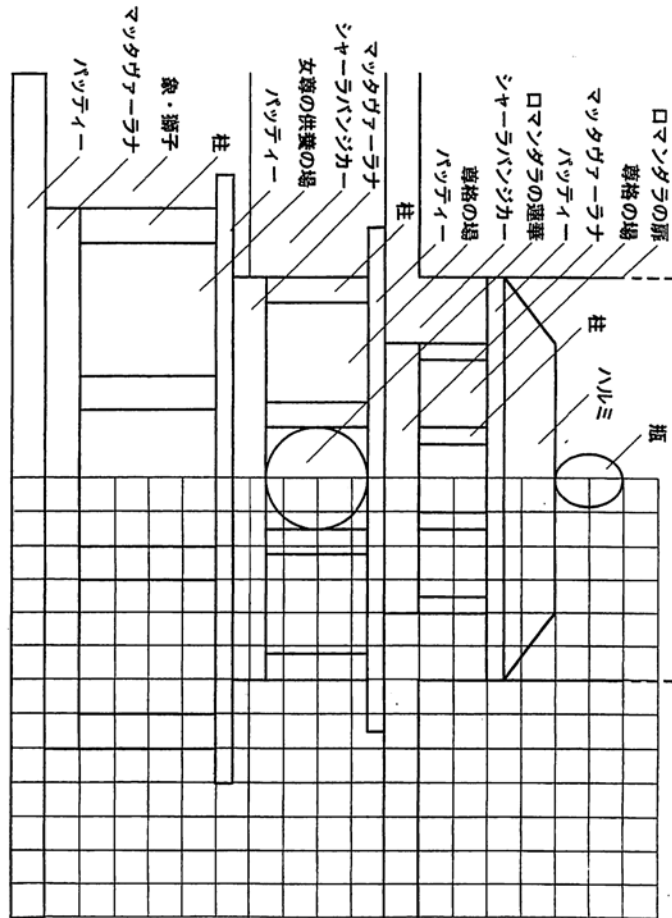


図 3 意密マンダラのトーラナとその周囲 (1目盛は1パートラ)

1 段目から 3 段目までは、大きさは順に小さくなるが、各部の構造と名称はほとんど共通している。1 段目の最も下の部分は「パッティー」(paṭṭī) と呼ばれ、幅 1 マートラ、長さ 24 マートラを占める。この上に幅 1 マートラ長さ 16 マートラの「マッタヴァーラナ」(mattavāraṇa) という名称の区画がある。これは文字通りには「酔象」を意味するが、建築用語のひとつであろう。マッタヴァーラナの上には幅 1 マートラ高さ 4 マートラの柱を 4 本、等間隔に置く。柱の間にできる縦横 4 マートラの正方形の区画は、「女尊の供養の場」(devīpūjāsthāna) と名付けられている。彩色されたマンドラでは、この場所には女尊のシンボルが描かれる。また、両端の柱のさらに外側には、パッティーの上に象と獅子を描く。象は前足を柱にかけ、獅子は象の頭の上に乗るといふ。以上が第 1 段である。

第 2 段ではパッティーが幅 0.5 マートラ、長さ 18 マートラ、マッタヴァーラナが幅 1 マートラ、長さ 12 マートラ、柱が幅 0.75 マートラ、高さ 3 マートラ、柱にはさまれた部分が一辺 3 マートラにそれぞれ変わる。最後の 3 マートラ四方の三つの部分は、「尊格の場所」(devatāsthāna) と呼ばれているが、実質的には前の「女尊の供養の場所」と同じであろう。パッティーの端には象と獅子に代わって、シャーラバンジカー (śālabhaṅjikā) すなわちシャーラ樹の女神が置かれる。第 1 段と第 2 段とは各部の大きさの比率が 4 : 3 になっていることが多いが、マッタヴァーラナやパッティーはこれに該当しない。

第 3 段はさらに小さくなり、第 1 段の半分、第 2 段の 3 分の 2 の大きさにはぼ縮小される。パッティーは幅 0.5 マートラ、長さ 15 マートラ、マッタヴァーラナは幅 1 マートラ、長さ 8 マートラ、柱は幅 0.5 マートラ、高さ 2 マートラ、尊格の場所は一辺 2 マートラになる。柱の両側には、第 2 段と同じようにシャーラバンジカーが置かれる。

第 3 段の上には幅 0.5 マートラ、高さ 12 マートラのパッティーが置かれ、

その上にハルミがある。トーラナ全体の説明ではハルミが2マートラであると述べられていたが、それはこのパッティーを含む高さである。ハルミの上辺は8マートラで、12マートラの長さを持つ下辺とを結ぶ線は斜めになる。ハルミの中央には2マートラの高さの瓶が置かれる。瓶については幅や形態についての規定がないため、図3では便宜上、楕円形で示した。

ハルミが具体的に何を表しているのかは不明であるが、ストゥーパの上にある「ハルミカー」(harmikā、平頭)とおそらく同じ語源の言葉であろう。建築用語と考えられ、実際のマンダラにみられる表現や、台形という形から、トーラナの部分の屋根に相当するのであろう。寺院などの建造物の屋根の中央に瓶を置くことも、インドでは広く行われている。トーラナは9尊の女尊が3段に分かれて窓から姿を見せる高樓のような形態を示している。

口密マンダラ

意密マンダラの領域は、根本線すなわち一辺48マートラの正方形の内部のみである。その外側は第2のマンダラである口密マンダラである(図4)。しかし、実際には意密マンダラの外壁が根本線の外側12マートラ分に描かれるため、これより外側にのみ口密マンダラを見ることができる。また四方では意密マンダラのトーラナによって隠れている部分がある。

はじめに、意密マンダラの外壁の外側の線から7マートラ離れて、梵線と平行に線を引く。これは意密マンダラと同様、特別の名称を持たない部分で、マンダラの四方の色に塗り分けられる。この外にさらに4マートラ離れて平行に線を引き、「尊格の帯」(devatāpaṭṭī)を作る。ここには直径4マートラの蓮華が四方と四隅に一つずつ、合計8つ置かれる。八母神と64ヨーギニーが乗る八弁の蓮華である。ただし、四方の蓮華が位置する部分は、ちょうど意密マンダラのトーラナによって、一部が隠されてしまう。

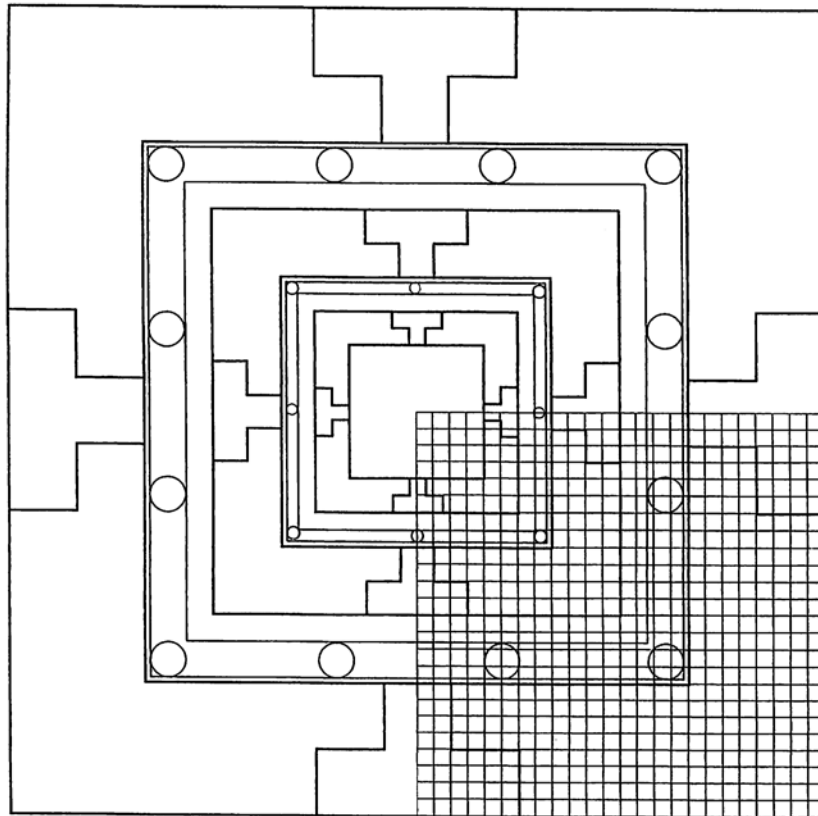


図4 身口意の三密マンダラ（意密マンダラの内部、トーラナ、外壁の中の線は省略。1目盛は6マートラ）

そのために、ここに限って、直径を4マートラから3マートラに縮小して、トーラナの第2段の中央の正方形(尊格の場所に相当)に内接させる(図3)。なお、意密マンダラの外壁から7マートラ離れて引かれる線も、意密マンダラのトーラナに重なり、第2段のマッタヴァーラナの下になる。

尊格の帯の外側に1マートラ離れて梵線に平行に線を引く。これが口密マンダラの根本線で、意密マンダラの場合と同様、中央の12マートラ分を門のために消す。口密マンダラの一辺は96マートラで、全体が意密マンダラの2倍となる。門とトーラナもこれにしたがい、意密マンダラに示した大きさの2倍で計測される。

身密マンダラ

口密マンダラをさらに2倍にしたものが、第3のマンダラである身密マンダラである(図4)。24マートラの厚みのある口密マンダラの外壁の外側から11マートラ離れて線を引き、さらにその外側に12マートラ分が「尊格の帯」になる。根本線はその外側に1マートラ離れたところに引く。根本線の一辺、すなわち身密マンダラの大きさは192マートラである。

尊格の帯には直径12マートラの蓮華が12個置かれる。四隅に一つずつ、各辺に二つずつである。各辺の中央に描く必要がないため、口密マンダラのトーラナに重なることはなく、いずれも12マートラの直径で描くことができる。これらの蓮華には12護方神と28ずつの女尊が位置する。そのため、12マートラの蓮華の直径を7等分し、中央の一つ分が花芯、その外側に一つ分ずつ三重の帯を作り、順に4、8、16の蓮弁とする。全体は等間隔の四重の同心円となる。

身密マンダラの門は、開口部が24マートラ、外壁の厚さは48マートラ、トーラナの高さは門の3倍であるため、72マートラとなる。口密マンダラのトーラナの外側で、身密マンダラの門の中央には、それぞれ12マートラ

の大きさの戦車 (ratha) が描かれる。

外周部

三重の身口意密マンダラの外側には、六重の円でできた外周部がある(図5)。内側から順に地輪 (pr̥thivīvalaya)、水輪 (jalavalaya)、火輪 (agnivalaya)、風輪 (vāyuvalaya)、虚空輪 (ākāśavalaya)、そして火炎輪 (raśmijvāla) である。幅は地輪と虚空輪の二つが12マートラで、それ以外は24マートラをそなえる。直径については具体的な数を示していないが、すでに述べたように、地輪の内側までが「マンダラの2倍」すなわち8ハスタであると規定されていることから、384マートラであることがわかる。梵線と対角線が引かれているのはここまでである。また、身密マンダラのトーラナの上端が、水輪のちょうど半分のところまで入り込んでいるという規定もみられる。24マートラの幅の水輪の半分、つまり梵線の延長線上で、地輪と火輪との境界線からそれぞれ12マートラ数えたところに、身密マンダラのトーラナの瓶の上端が接する。身密マンダラのトーラナは72マートラの高さを持つため、マンダラの中心から数えて216マートラのところに相当し、4ハスタに相当する192マートラに、地輪の幅12マートラと、水輪の幅の半分である12マートラを加えた数に一致する。

時輪以外のマンダラの場合、外周部は蓮弁、金剛杵輪、火炎輪の三重で構成されていた。サンヴァアラなどのマンダラの場合、この外側に八屍林を描くこともあった。これらのマンダラを観想する場合にも、風輪から地輪に至る四大輪を、マンダラの楼閣の基底部として観想したが、実際のマンダラの外周部には表現されていない⁽¹⁷⁾。時輪マンダラでは楼閣の外側にこれらの四大輪を実際に同心円状に表し、さらに虚空輪と火炎輪を加えることで、この部分を著しく拡大している。

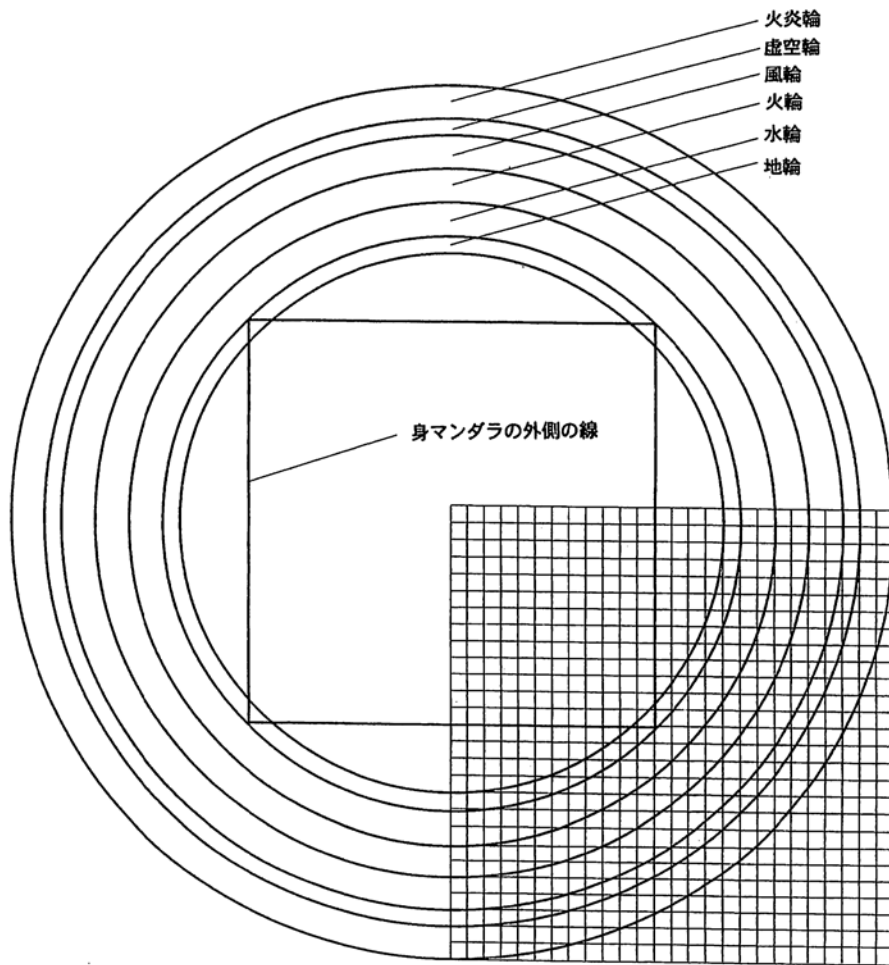


図5 時輪マンダラの外周部 (1目盛は12マートラ)

3 おわりに

アバヤーカラグプタの VA にもとづいて、時輪マンダラの墨打ちの方法を概観してきた。ここで示した内容は、表現は異なるものの『無垢光』の中の墨打ちの内容にほぼ合致している。『無垢光』は VA の中でも言及されたり、引用されていることから、アバヤーカラグプタがその内容を VA の中で踏襲したとみて間違い¹⁰⁸ないであろう。これらの記述に従って再現した時輪マンダラの輪郭線は、現在のチベット仏教徒たちが制作する、いわゆる砂マンダラの時輪マンダラの形態にほとんど同じである。この形態がすでにインド密教で確立されており、その伝統がチベットに忠実に継承されていったことが確認できる。

時輪マンダラがそれ以前に登場したマンダラと異なる形態を持つことは、その典拠となる『時輪タントラ』が持つ独自の教理体系からも説明されなければならない。しかし、トーラナにみられるようなこのマンダラ特有の形態や用語は、具体的なイメージの源泉そのものが、それまでのインド密教とは別のところにあったことも示唆している。

註

- (1) 時輪マンダラを構成する尊格については田中（1994、1987）にしたがった。
- (2) サンスクリット・テキストがサルナートの CIHTS から刊行されている（Upadhyaya 1986; Rinpoche 1994a, 1994b）。チベット訳は TTP, No.2064。
- (3) 羽田野（1949）。
- (4) サンスクリット写本は影印版として Lokesh Chandra（1977）があり、そのほかにも10本以上が現存している。チベット訳は TTP, No.3961。本稿ではこれらにもとづいて作成したエディションを用いた。時輪マンダラの墨打ち法は Lokesh Chandra（1977: ff.86-95）、TTP, Vol. 80, 96.3-97.5に説かれる。なお VA については桜井（1996）および拙著（1997）も参照。

- (5) VA と『ニシュパナヨーガーヴァリー』(*Niṣpannayogāvalī*) のマンダラの配列については拙稿 (1996b) 参照。
- (6) このほかに『時輪タントラ』に関する研究として Tenzin Gyatsho and Hopkins (1985)、Simon ed. (1985)、松本 (1997) などがあげられる。
- (7) 田中 (1994 : 153、164、199 etc.) に示されるマンダラの楼閣の輪郭線は、本稿で示すものと一致しない。とくに楼閣の門の部分は、VA において時輪以外のマンダラの門の形として規定されているもので、時輪マンダラでは採用されていない形態である。
- (8) マンダラの墨打ち法についてはこれまでも拙著 (1992、1993、1996a、1997) において示してきたが、これらはいずれも時輪以外のマンダラに共通する構造である。なお拙稿 (1996a) の図 1 はマンダラの楼閣の門とトーラナを示したものであるが、編集の不慎で不適切なものになっている。正しい図として拙著 (1997 : 131) の図 6 を参照していただければ幸いである。
- (9) 拙著 (1997) では明確には示さなかったが、VA に説かれる時輪以外のマンダラでは、楼閣の内陣ではなく外壁の一边 (側面線と呼ばれる) が、外周部の外側の円の直径の 2 分の 1 の長さとする説と、内陣の一边の長さ (すなわち根本線) が外周部の内側の円の 2 分の 1 とする二つの説が説かれている。はじめの説の場合、トーラナの高さは 12 マートルとなるが、第 2 の説では 4 マートルとなる。「内のマンダラの 2 倍が外のマンダラの大きさである」という規定が、アーナンダガルバ (*Ānandagarbha*) の『サルヴァヴァジュロダヤ』(*Sarvavajrodaya*) などにあり (密教聖典研究会 1987 : 269-270 ; 森 1996a : 155、158-160)、アバヤーカラグプタは「内のマンダラ」と「外のマンダラ」を二通りに解釈することで、いずれの説もこの規定に合致させている。時輪マンダラは第 2 の説と同じ立場をとっていることになる。
- (10) VA に説かれるマンダラの数を 26 と数えた場合、第 5 番から 13 番の 9 種と、第 17 番、第 25 番。
- (11) 時輪マンダラの塗り分けについては田中 (1994) の第 II 章が詳しい。
- (12) 拙著 (1997 : 133) の図 7 参照。
- (13) 時輪マンダラの考案者が、拙著 (1997 : 131) の図 6 で示したような一般

的な門ではなく、おそらくそれよりも古い形態を示すナーガブッディ所説の門と同じ形態の門を採用した理由は明らかではないが、時輪マンダラの形態の起源を考えるときに、このことは重要であろう。

- (14) アバヤーカラグプタが VA の中でしばしば言及するディーパンカラバドラ (Dīpaṅkarabhadra) の『マンダラ儀軌四百五十頌』やナーガブッディの『マンダラ儀軌二十』に含まれ、VA の中でも引用されている (Dīpaṅkarabhadra, *Śrīguhyasamājamaṇḍalavidhi*, TTP, No.2728, Vol.65, 40.1.4-5; Nāgabuddhi, *Śrīguhyasamājamaṇḍalopāyikā-viṃśatividhi*, TTP, No.2675, Vol.62, 13.2.8-3.1; VA, No.3961, Vol.80, 91.5, 92.2, 93.1, 93.3)。ただし、このうち VA の用例のひとつは、高さ 4 マートラのトーラナを説明するため、トーラナの高さではなく、幅が門の 3 倍であるという解釈があわせて示されている。
- (15) Acharya (1978 : 410) によれば「長押し」(entablature) のひとつ。
- (16) VA の本文ではハルミの高さは全体の説明において 2 マートラと指定されるのみで、各部の大きさの説明では明らかにされていない。かりにこの 0.5 マートラのパッティーの上に 2 マートラのハルミがあるとすると、トーラナ全体は 18.5 マートラの高さとなり、はじめの規定に合致しなくなる。したがって、トーラナ全体で規定される 2 マートラのハルミは、この 0.5 マートラのパッティーを含むものと解釈しなければならない。『無垢光』でもこの箇所は類似の内容で、パッティーをのぞいたハルミの高さは明記されていない。
- (17) 時輪以外のこれらのマンダラでは、楼閣と外周部にはさまれた「金剛地」(vajrabhūmi) と呼ばれる部分に、四大輪を象徴する 4 種の色を適宜塗るよう指示され、四大輪と外周部とは結びつけられていない。
- (18) 成立年代は不明であるが、サードゥプトラ (Sādhuputra) による時輪マンダラの儀軌書にも、『無垢光』や VA と同じ形態のマンダラが説かれている (*Śrīkālacakramaṇḍalopāyikā*, TTP, No.2067, Vol.47, 207.3.5-208.3.1)。

略号

TTP: Tibetan Tripiṭaka, the Peking edition. 『影印北京版西藏大藏經』鈴木学術財団。

VA: *Vajrāvalī-nāma-maṇḍalopāyikā*.

文献

- Acharya, P. K. 1978(1927) *A Dictionary of Hindu Architecture: Treating of Sanskrit Architectural Terms with Illustrative Quotations from Śilpaśāstra*. General Literature and Archaeological Records. Bhopal: J. K. Publishing House.
- Brauen, M. 1992 *Das Mandala: Der Heilige Kreis im Tantrischen Buddhismus*. Köln: DuMont Buchverlag Köln.
- 羽田野伯猷 1949 「時輪タントラ成立に関する基本的課題」『密教文化』8(2): 18-37。
- Lokesh Chandra (reproduced) 1977 *Vajrāvalī: A Sanskrit Manuscript from Nepal Containing the Ritual and Delineation of Maṇḍalas*. Śata-piṭaka Series, Indo-Asian Literatures Vol.239. New Delhi: International Academy of Indian Culture.
- 松本峰哲 1997 「*Vimalaprabhā*「タントラの所説の略説」の章における引用文献について」『論集』24: 1-16。
- 密教聖典研究会 1987 「*Vajradhātumahāmaṇḍalopāyikā*-Sarvavajrodaya—梵文テキストと和訳(Ⅱ)完」『大正大学総合仏教研究所年報』9: 13-85。
- 森 雅秀 1992 「観想上のマンダラと儀礼のためのマンダラ」『日本仏教学会年報』57: 73-90。
- 森 雅秀 1993 「サンヴァラマンダラの図像学的考察」立川武蔵編『曼荼羅と輪廻』佼成出版社、pp. 206-234。
- 森 雅秀 1996a 「マンダラの形態の歴史の変遷」立川武蔵編『マンダラ宇宙論』法蔵館、pp. 101-124。
- 森 雅秀 1996b 「『完成せるヨーガの環』の成立に関する一考察」『密教図像』15: 28-42。
- 森 雅秀 1997 『マンダラの密教儀礼』春秋社。
- Newman, J. R. 1987a *The Outer Wheel of Time: Vajrayāna Buddhist*

- Cosmology in the Kālacakra-tantra*. PhD dissertation submitted to Wisconsin University.
- Newman, J. R. 1987b *The Paramādibuddha* (The Kālacakra Mūlatantra) and Its Relation to the Early Kālacakra. *Indo Iranian Journal* 30(2): 93-101.
- Newman, J. R. 1988 Buddhist Sanskrit in the Kālacakra Tantra. *Journal of the International Association of Buddhist Studies* 11(1): 123-140.
- Newman, J. R. 1992 Buddhist Siddhānta in the Kālacakra Tantra. *Weiner Zeitschrift für die Kunde Südasiens* 36: 227-234.
- Newman, J. R. 1998a The Epoch of the Kālacakra Tantra. *Indo Iranian Journal* 41(4): 319-349.
- Newman, J. R. 1998b Islam in the Kālacakra Tantra. *Journal of the International Association of Buddhist Studies* 21(2): 311-371.
- Rinpoche, Sambhong 1994a, 1994b *Vimalaprabhāṭikā of Kalki Śrī Puṇḍarīka on Śrī Laghukālacakratantra-rāja by Śrī Mañjuśrīyaśa*. Vol.s 2, 3. Sarnath: Central Institute of Higher Tibetan Studies.
- Simon, B. ed. 1991 (1985) *The Wheel of Time: The Kalachakra in Context*. New York: Snow Lion.
- 桜井宗信 1996 『インド密教儀礼研究—後期インド密教の灌頂次第』法蔵館。
- 田中公明 1987 『曼荼羅イコロジー』平河出版社。
- 田中公明 1994 『超密教時輪タントラ』東方出版。
- Tenzin Gyatso, the Fouteenth Dalai Lama & J. Hopkins 1985 *The Kalachakra Tantra: Rite of Initiation for the Stage of Generation*. London: Wisdom Publications
- Upadhyaya Jagannatha 1986 *Vimalaprabhāṭikā of Kalki Śrī Puṇḍarīka on Śrī Laghukālacakra-tantrarāja by Śrī Mañjuśrīyaśa*. Vol. 1. Sarnath: Central Institute of Higher Tibetan Studies.